

目次

盗まれた指

5

訳者あとがき

213

解説 ストラングル・成田

217

主要登場人物

エイメ・マレイズ	ブリュッセル警察の警部
私	著者であるスタニスラス・アンドレ・ステーマン
レオナール・ヴァドボンクール	X……駅の駅長
アンリ・ド・シャンクレイ	トランブル城の城主
ガブリエル・レイモン	城主の家政婦
マティアス	庭師
クレール	城主の姪で、唯一の血縁者
エルヴィール	城主の元妻
ジェローム	家政婦の夫
ジャン・アルマンタン	クレールと恋に落ちる若者
赤狼	密猟人
メルロ	医師
セザール・ブーシヨン	予審判事
エカシユール夫人	城で手伝いをする村の女性
ラジュス先生	公証人
ウオルテル警部	マレイズの部下
ピエール	猟場番人
ポール	マティアスの兄
マシユー夫人	駅長をかくまった未亡人
リオネル・メヌリ	興行主で城主の古い友人

盗まれた指

I マレイズと私

「バカな早とちりはやめてくださいよ」

マレイズがゆつくりと私に言った。

「あなたはつねに自分の洞察力を私に見せつけようとするが……、しかし、偶然の助けを借りなければ、トランブル城事件はいまもって解決していなかったはずですよ」

「トランブル城事件とは？ そんな事件のことは今まで聞いたことも、読んだこともありませんが……」

「当然です」とマレイズが答えた。

「古い事件ですからね。私がこの仕事を始めた頃に関わった事件の一つです」

彼は少し笑って言った。

「ちよつと思ひ出したのですが、あなたは冒険小説大賞を狙っていましたね……。この話を書いてみたらどうでしょう？」

「さあ、どうですか。もしミステリとして面白ければ……」と私は言った。

マレイズはパイプにタバコを詰めるのをやめ、頼りがいのありそうな大きな手を私に差し伸べ

た。

「いや！ それに関しては大丈夫。トランブル城事件は私が担当したなかでもいちばん面白い事件の一つです。まあ、予審のあいだはそこまでとは思わなかったのですが、結末で私の苦勞が大いに報われたと言っているでしょうね……。私の話を聞いてみる気はありますか？」

「もちろんです、書きましょう。それで、万が一、あなたのおかげで大賞がもらえたら……。そりゃもちろん！ マレイズさん、賞金は折半することにしましょう。折半することに」

しかし、マレイズはパイプに火をつけながら首を振り、素っ気なく答えた。

「まあまあ、あなたはいつもそういうことばかり言う……」

Ⅱ 事件に向かつて

十月二日

X……駅の駅長レオナル・ヴァドボンクールにとっては、二十一時三十五分に到着する列車より、普段の布靴から半長靴に履き替えるほうが重要でおおごとだった。実際、三カ月前に新しい職務に就いてから、この列車から降りる旅行者を見たのは一回だけ、しかもひとりだけだった。それをよく覚えているのは、旅行者が駅を間違えて降りてしまい、可哀想に思ったヴァドボンクールが自分の家に泊めてあげたからである……。

けたたましいベルの音が、狭い駅長室に鳴り響いていたにもかかわらず、駅長は読みかけの恐怖小説『爆弾女とその嫁』第四章を終わりまで読み、それから巨体を起こし、信号灯を手にプラットホームへ出ていった。列車は蒸気に包まれて止まっていた。

機関士が機関車から身を乗り出し、ようやくあらわれた駅長に卑猥な冗談を交えて挨拶した。しかし、独身のヴァドボンクールには何の効果もないとわかるや、身振り手振りで、出発合図の笛を待っているだけだと伝えた。

そのとき、ドアの一つが開き、若い女性がプラットホームに降り立った。

駅長はすぐに女性のほうに駆けつけた。

「すみませんがお嬢さん、ここはX……ですが」

若い女性は微笑んで答えた。

「はい、わかっています」

ヴァドボンクールはびっくりし、危うく笛を飲み込むところだったが、しかし、やるべきことはわかっていた。

「あなたは間違っているはずです。X……には誰も下車しません。誰も、決して、この駅では降りません」

彼は食い下がった。

「それは残念ですこと。だって、こんなに親切な駅長さんとお知り合いになる機会を逃すことになりそうですわ」

彼女はそう言って身をかがめ、横に置いたスーツケースをつかむや、出口に向かってしっかりとした足取りで歩きだした。

《こりゃ狂気の沙汰だ。俺があれだけ言っているのに無視するとは……。とヴァドボンクールは独り言を言った》

彼は仕方なく肩をすくめ、とっさに思いついたメロディーで笛を吹いた。その勢いに、驚いた機関士がまた機関車から身を乗り出したが、そのまま発車していった。

ヴァドボンクールは、閉まったままの改札口の前でじっと待つ女性の元へ駆けつけ、彼女が街灯の白っぽい光に照らされていたのを利用して、頭の前から足の先まで素早く点検した。

それは間違いない若い女性だった。濃い紫色の毛織物のスーツを着て、小さな帽子を斜めにかぶっている。駅長はさらに細かく、海の色をした目と、くすんだ顔色、スエードの手袋、褐色の革のスーツケースもチェックした。そうして確信したのは、この若い女性はX……に降りたことで、人生最大の間違いをおかした、ということだった。

「すみませんがお嬢さん。私は好奇心から言っているではありません。ただ、誰か迎えにきているかどうかを知りたいのです……」

彼は言った。

「なぜそういうことを？」

彼女が聞いた。

「だって、もう遅いですよ、お嬢さん。それに、ここから村までは十五分ほど歩かなければなりません……。それで……」

若い女性は改札口から身を乗り出し、駅前の広場を見つめた。

「ご親切にありがとうございます。ご安心ください……。迎えの人がいますから」

彼女は言った。

迎えがいる！ 《そうなのか！ だったらいいとするか……。しかし、いったい誰が迎えに来るというんだ？》とヴァドボンクールは独り言を言った《

今度は彼が身を乗り出し、そして、謎の説明がついた。

駅の玄関前にみすばらしい二輪馬車が止まっていた。座席には男がひとり、じっとしている。駅長は若い女性の切符を取り、改札口を開けて言った。

「どうもすみませんでした。しかし、あそこは何にもないところで……。それに、あなたがトランブル城にいらっしゃるとは、まったく想像もしなかったものですから……」

広場に向かって二、三步歩いていた若い女性は、立ち止まって振り返った。

「まあ、本当に？ どうしてそんなことを思われたのですか？」

彼女は言った。ヴァドボンクールは駅長帽を持ち上げて、頭を搔いた。

「あ、いえいえ、ただそう思っただけで。なにしろ城は人里から離れていますから……」

「それだけですか？」

「はあ、そうです。それに、ド・シャンクレイ氏はとりわけ《人づきあい》がよろしくなくて、違いますか？ 滅多に見かけないと言つてもいいほどですからね。ときどき、遠くの道を散歩しているときぐらいで……」

「でも、ひとりで住んでいるわけではないですよね？」

「ええ、家政婦のレイモン夫人がいます。それと庭師のマティアス。彼はあそこ、二輪馬車にいます」

「あら、そう！」

彼女は言った。その声はいまや、わずかにかすれている。

〔訳者〕

鳥取絹子（とっとり・きぬこ）

翻訳家、ジャーナリスト。著書に『星の王子さま 隠された物語』（KK ベストセラーズ）、『フランス流 味の探究』（平凡社新書）など。訳書に『巨大化する現代アートビジネス』（紀伊國屋書店）、『庭師が語るヴェルサイユ』（原書房）、『フランス人は子どもにふりまわされない』『フランスのパパはあわてない』『最新 地図で読む世界情勢』（いずれも CCC メディアハウス）、『ピカソになりきった男』（キノブックス）、『素顔のココ・シャネル』（河出書房新社）など多数。

ぬす ぬび
盗まれた指

——論創海外ミステリ 183

2016 年 11 月 25 日 初版第 1 刷印刷

2016 年 11 月 30 日 初版第 1 刷発行

著 者 S・A・ステーマン

訳 者 鳥取絹子

装 画 佐久間真人

装 丁 宗利淳一

発行所 論 創 社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル

電話 03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

ISBN978-4-8460-1566-4

落丁・乱丁本はお取り替えいたします